

高井 詩穂、松前 もゆる、村上 公子、村田 晶子、弓削 尚子

《企画》

座談会 コロナ禍とジェンダー

2020年9月3日（木）Zoomにて実施

Roundtable: Gender in the Time of Coronavirus

弓削：今日は、ジェンダー研究所の座談会として「コロナ禍とジェンダー」というテーマで4人の先生方にオンラインにてお集まりいただきました。

コロナ禍と言われて半年ほどが経ったわけですが、先生方はまずは生活者として何を考えどうお過ごしになったのか、お1人ずつお話いただけたらと思います。

私などは、保育園の送り迎えのお父さんが増えた印象があって、土日にも子どもたちと遊んでいるお父さんや家族の姿が目立つ、そういう光景の発見がありました。高井先生はいかがでしょう？

高井：私は1月の半ばから育児休暇に入ったのですが、コロナ禍になったことでこの半年はキャンパスに足を踏み入れていません。育休であっても時々は早稲田に行ったり、4月の新入生との交流やイベントに顔を出すつもりでいたので、そうしたイベントが全てキャンセルになり、想像していた状況とはだいぶ違っています。そのなかで生活者として、コロナ禍での子育てについていろいろ考えることがあります。初めての子育てだからなのか、コロナ禍だからなのか、というのはまだわかりませんが、他の人と顔を合わせる機会がほとんどな

* 高井詩穂（文化構想学部、国際日本学・日本文学）、松前もゆる（文化構想学部、文化人類学・バルカン地域研究）、村上公子（人間科学部、ドイツ現代史・ドイツ地域研究）、村田晶子（文学部、教育学・社会教育学）、弓削尚子（法学部、ドイツ史・ジェンダー史）

早稲田大学ジェンダー研究所紀要『ジェンダー研究21』
2020年vol.10©Waseda University Gender Studies Institute

いということが、さらに輪をかけているのかもしれないと考えています。それに、以前から夫は在宅ワークでずっと家にいたのですが、コロナ禍ではそれが珍しくなくなった、むしろ夫が在宅であることがノーマルと周囲に受け取られるようになった印象を受けました。

松前：まず、生活者としては、私は1人暮らしなので正直あまり大きな変化がない気がしています。逆に、ステイ・ホームのホームがつねに1人なので、それでも私などはある時期からはZoomであっても授業が始まって学生とのコンタクトがあって救われたのですが、たとえばこれが定年後であるとか、1人になった時にどうなるのかと生活の中で実感をもって感じられました。

また、私個人ではコロナ禍による実質的な問題をまだ抱えていないと言いましたが、九州にいる両親とはオンラインでやりとりをしていて、高齢の両親に万が一私がうつしてしまったらと思うと気軽に移動できない状況があります。ちょっとした条件の違いで、たとえば遠距離での介護をされている方は、すごく大変だろうなと感じています。そうした方は、より負担が大きくなっているだろうと思います。それから、私は文化人類学を専門にしているので、夏休みのような長期的な休みでも海外へ調査に行けず移動の制限というものを受けたことで、普段いかに自分が移動して生活を成り立たせていたかと気づかされています。

村上：コロナ禍での生活で言いますと、私自身はあまり変わらず、近居の子どもが普段は会社に通勤しているところ、週1、2回の出社以外はリモートワークに生活が切り替わったことが変化としてありました。それから、介護施設に入居している高齢の母との面会が難しくなり、3月から面会謝絶になってしまいました。母は調子の良い日と悪い日があって、電話の声だけで判断するしかないので心配をしています。教員としては、慣れないリモート授業が始まって、学生に迷惑をかけたかなということがあります。

村田：私の生活の中での変化ですが、いちばん大きかったのは地方の大学院にいる下の子の生活です。地方の方の目が厳しいので、東京に帰るのをずいぶん



我慢していました。大学院では学校にインターンとしてお世話になっているのですが、受け入れ先でも下の子が東京出身ということで、あからさまな差別とまではいきませんが、ピリピリとした空気を感じながら過ごしているようです。

自分の暮らしはあまり変わっていませんが、よく目

を凝らすと、周りの人がコロナ禍で人との距離をはかりかねたりしているのを感じたり、「コロナに罹りたくない」ということ以上に、人間関係が問われていると感じています。

子育ても介護もわりと女の人が背負っているので、この状況でかなり負荷がかかっているのではないかと考えています。とくに一時期、学校がいきなり休校になりましたし、この時期の負荷は大きかったと思います。コロナ禍での研究上の課題ももちろんありますが、こうした状況の中で研究をしていく人たちが何か発信していく必要があるのではないかと思い、本日の座談会を提案しました。

弓削：座談会の趣旨についてお話いただきありがとうございます。このコロナ禍で、早稲田大学は2019年度の卒業式ができないまま学生を送り出しました。入学式もなく、5月中旬に全面遠隔授業として2020年度の春学期が始まりました。

遠隔授業が始まったことで、先生方には家庭が職場になり、研究室になり、かつ教室になったと言えます。また、Zoomやオンデマンドでいろいろな境遇にある学生たちが辛い思いを投げかけてきたこともあるのではないのでしょうか。

この春学期に感じたり対応したりしたジェンダーの問題についてお話しいただけますか。

ちなみに私の周りでは、非常勤の先生方が非常に大変な思いをされていました。まだお子さんが小さかったりすると、授業中に「ママー」と言って子どもがZoomの画面に入ってくるとか、学校がいつ始まるかわからず、お子さんの不安な時期に寄り添わずに自分の仕事をしてよいのかと悩んだり、非常勤先の大学ごとで違っているオンライン授業のシステムに対応するなど、かなり苦勞なさっていました。子どもの声に恐縮し、仕事を続けることに悩みを抱えている先生に対してどのような声かけをするのか、とても大事なことだと思いました。

高井：非常勤の先生ということですが、私は今年、育休取得のため代行の先生をたくさん頼んでいます。その非常勤の先生方には事前に担当授業の引き継ぎをしていましたが、コロナ禍で予定していた対面での授業や演習がなくなってしまい、その代わりに非常勤の先生方が慣れないオンラインで、さらに会ったことがない学生といきなり小規模の演習やゼミをするという状況にありました。私の所属するJCulP（国際日本文化論プログラム）は海外の学生も多く、Zoomのコネクションが悪くて画面が固まったりなど様々な問題があったことを、学期の途中で聞きました。途中といってもJCulPはクォーター制なので、ほぼ終わりの時期に当たりました。遠隔授業のおかげで海外や地方からでも授業に参加できるなど、Zoomの授業はいろいろなよい点もありますが、やはり一度も会ったことがない者同士で、しかもホストとなる教員側もオンライン授業が初めてにもかかわらずZoomを使用して、さらに関係が密接な演習や討論をする場所としての雰囲気づくりをする、というのは難しいと感じました。

村上：大学院の授業で、クォーター制の授業を2人の教員で担当するという授業がありました。歴史哲学の入門でテキストを読むという授業で、私とペアを組んでいる先生がプログラムを作って、今回も彼が最初の計画を決めてくれたのですが、Zoomでしかもカメラはオフで音声のみの演習を行うという授業で

した。

登録者10名ほどのうち半分は中国からの留学生および科目等履修生で、学生がテキストを担当して報告して議論をするかたちです。留学生の中でも言語能力の差が大きくて、テキストを読めて議論もできる人もいれば、読みきれていない人もいるのはコロナ以前からあったのですが、それを音声だけで演習をするとすると、何を言っているかわからない状態の発表になる学生もいて、報告する方も辛いし、聞いている方はもっと辛い。それを教員がどれくらいフォローしたらよいか判断しかねてしまって大変だったなという思いはありました。これはまったくジェンダーには関係がなくて、コロナ禍での授業で大変だったことということになりますけれど。

弓削：私たちはどれだけ顔の表情から情報を得ているかということですね。私の場合、たとえオンラインでよいディスカッションができた授業であっても、学生と一度も直に対面することがないまま終わってしまうと、学生たちと共有した時間に実感が持てないということがありました。顔が見えるだけでも物足りない、という思いです。

村田：私の「ジェンダーと教育」の授業では、Zoomを使用することを学生に伝えた時にこんなことがありました。私としては演習ですので、できればカメラオンにしてほしいと学生に伝えたところ、「私はカメラをオンにしたくない」という学生がいました。「盗撮されるおそれ」があるからとか「身支度ができていない」、「兄弟姉妹と一緒にの部屋だから」などいろいろな理由を言っていました。そうしたことを様々に気を配って受講しなければならない状況で学んでおり、配慮しなければならないと思いました。

一方で、早稲田のキャンパスにまだ一度も来たことがない新1年生で、地方の自宅で授業を受けている学生たちが、とても積極的に発言してくれたりグループワークの時も司会をしてくれたり、カメラをオンにして積極的に顔を出して話し合いに参加してくれました。

その人のバックグラウンドやいろいろな考え方もあるので、こちらもかなり

配慮してやらないといけないなと思いました。まったく誰も先が見えない状況の中で、教員もですけど、学生同士も不安の中で意見交換することになりかねないなと思って、これはどうしたらよいかと授業の途中で悩みましたね。

松前：私もゼミの人数だとたいい全員がカメラをオンにして顔を出してくれて、グループワークをしてもお互い顔も見えているし、同じゼミだとわかっていっているので、ディスカッションも盛り上がりました。それがある程度の人数になってくると、たとえば私のいる文化構想学部の演習だと学生が30人いるのですが、私の講義の間はもちろんですが、グループディスカッションになっても顔を出したくない学生も出てきます。強制はできないのでカメラをオンにするかしないかは学生に任せていましたが、後から学生に反応を聞きますと、顔が見えないとディスカッションがしづらかったという意見も聞こえてきました。表情とか、表情だけでなく身体全体から醸し出す雰囲気から私たちはいろいろな情報を得ているので、確かにディスカッションしづらかっただろうと思う一方、顔を出したくない学生もいると思うので、秋学期以降どうしていこうかと今も悩んでいます。

もう一点は、留学生で新入生の場合、キャンパスにはまだ来たことがないけれど日本には既に来ていて、留学先の日本で1人アパートで授業を受けているという感じの学生がいて心配で、また、秋学期がオンラインですと伝えた時に画面の前でがっくりしていた姿が見えて、どうフォローしていくか考えています。

そのほか、よく、これまでなかなかキャンパスに来られなかった学生が、Zoomで授業を受けてみたら意外に勉強が面白くて思わぬ効果があったと言われていて、それはオンラインのプラスの側面だと思いますけれど、この状況でアクセスしてこない学生をどうフォローしたらいいのか、オンラインも対面でも一緒かもしれませんが、これまで一度も直に対面で接していない学生についてこちらがほとんどその学生の情報を持っていない中で、学生へのフォローをどうしていったらよいか考えているところです。もちろんメールを出したり

しますが、メールに応答があるかもわからないので。

弓削：そうですね。そういう学生にはいろいろなところからメールがきているでしょうし、コロナ禍では、語りかける方法がすべてネット経由というところが悩ましいところです。

先生方のお話を聞いていて、大学で耳にした案件があったので紹介したいと思います。顔の話題が出ていたのですが、名前の問題もあります。たとえば100人の学生が講義を履修する場合、教室では誰が受講生なのかは漠然としかわかりません。ところが、Zoomになるとカメラがオフになっていても、参加者全員の名前が表示されます。性自認とのズレで、自分の名前に満足していない学生が、「自分の名前が他の受講者に知られるのは嫌だ」という意見が出ているようです。個人情報の問題でもあるのですが、授業を受講している全員に名前が公開されるということはあってよいのか、もしかしたらジェンダーの授業に出ていることをできれば知られたくない、という学生もいるかもしれません。

村田：名前の表示を消すことはできませんか？

弓削：表記を変えることができます。ただ出席の管理もありますし、フルネームで書く必要はないけれど、後から個別に教員が名前を確認する必要があります。

高井：私がアメリカで教えていた時も、ジェンダーについて主張がはっきりしている学生が多く、登録された名前が書いてある名簿があってもそのまま使わずに、最初にどう呼んでほしいか学生本人に尋ねてから授業を始めていました。それを踏襲して、JCulPでも最初に1人ずつ何と呼んだらよいかを聞いています。たとえば中国からの留学生で、英語名で呼んでほしい学生もいますし、アイデンティティの意識の高さなど、いろいろあると思うので、呼んでほしい名前前で呼ぶようにして、毎年尋ねるようにしています。そうしたら、JCulPじゃない学生の方も授業に時々いるのですが、名前の呼び方を先生に聞かれて驚いたというコメントをもらったりしました。多くても40人ほどの授業で基本的に

はネガティブな反応はないので、大講義では同じようにはできませんですけど、名前の呼び方を確認することはした方がいいかなと思ってしています。

弓削：アメリカの大学ではそういう確認をしているとよく聞きます。高井先生のおっしゃるとおり、名前はアイデンティティにとって非常に重要で、画面に小さく表示される名前表記に辛く感じたり悩んだりしている学生もいるかもしれないという気づきが求められますね。学生にとって、教員によるそうした配慮は大きいと思います。

では、2つ目の論点に移りたいと思います。研究者としてこのコロナ禍をどうお過ごしになっているのか。先ほど松前先生が文化人類学者としてとにかく移動あつての研究ということをお話しいただきました。先生はバルカン地域研究がご専門ということで、対象となっているフィールドで今何が起きているか、何かジェンダー問題などありましたら伺いたいです。

松前：そうですね、ブルガリア自体はある時期まではヨーロッパの中では比較的感染者が少なかったと思います。イギリスやイタリアで爆発的に感染者が増加した時期に、旧東欧は総じて感染者が多くない状況でした。ただ、EUの一員なので一律に非常事態宣言は出され、基本的な生活必需品などの必要最低限の活動以外がストップしました。5月に非常事態宣言が明けて以降のほうが感染者が増えていますが、バカンスの時期に入ってしまうなんとなくそのままになっています。

今、私が調査をしているのは、ブルガリアから西ヨーロッパへ出稼ぎに出ている人たちです。男性では配送のトラック運転手・農業での季節労働者や工場労働者として、女性では同じく季節労働者・住み込みのケアワーカー・家事や清掃の仕事など、エッセンシャルワーカーと呼ばれる仕事をしている方たちということになります。

特にイタリアで家庭内のケアの仕事に従事している女性たちは、労働契約を結んでいる場合とインフォーマルなかたちで契約を結ばずに（社会保険に入ると雇用者はよりお金がかかり、被雇用者はお給料が減ってしまいますから）仕

事をしている場合があります。ロックダウンが始まって、労働契約の証明書がない場合は外出ができませんので、インフォーマルな仕事はできなくなります。女性のケアワーカーは一部の仕事先で労働契約を結んでいても、すべての仕事先と結んでいるとは限りません。そのため一定期間仕事をストップせざるをえなくなりました。イタリアではその後、介護施設でのクラスターが発生したことを受けて家庭内で高齢者をケアする需要が高まり、緊急事態宣言が明けた後は仕事が増えたそうで、今バカンスのシーズンですが、ロックダウンの期間に働けなかった分もありますし、今年は休まず働かなければという状態だと聞きました。家庭内のケアワーカーのインフォーマル性という問題はずっと言われてきて、それが解決していなかったことが、コロナ禍で問題が顕在化してしまったと考えています。

弓削：村上先生、ドイツについてはいかがでしょうか？

村上：最近のドイツの様子は、私がドイツの新聞・雑誌・テレビのマスメディアのニュースから得る知見になるのですが、その中で気になったのが、ロックダウンになってからかなり早い時期に女性のほうから「女が損をしている」というような論調の記事が大きく出てきた点です。

パンデミックになった途端に、社会のいろいろなところのレプレゼンターとして出てくる人が男になったという言い方が1つと、それから、でも実際に最前線で命がけて働いている人はほとんど女性であること、看護師さんも女性がほとんどですし、食料品などを扱うお店は休みませんでしたから、そこでレジを打つ仕事をする人もほとんど女性で、さらにそういうところで働いている人は外国人労働者の場合も結構あったし、それから高齢者の介護施設で働いている人も、プライベートに高齢者の介護をしている人たちも、東欧からの外国人労働者が非常に多いわけです。

ドイツ人で、ある程度収入があって比較的大きな企業で働いている人たちは在宅ワークになって、そこでも女性の方が負担が大きいとなったのですが、そうではなくて、ロックダウンになった中で、まさにコロナウィルスと面と向か

って闘う、あるいは接触するかもしれない状況で働く人は多く女性であるし、そのことは高く評価されていたのですけれども、じゃあ彼女たちの功績を口で讃えるだけではなくて、経済的にそれに見合うだけの給与・賞与のかたちでも何か報酬があるのかと思っていたら実際にはない、ということが日本と同様にありました。その不公平というのはどうするのかということが、もう1つ大きな問題になっていたということです。

弓削：科学技術・医療の専門家はやっぱり男性よね、といったステレオタイプが出てきているのは日本の報道でも同じですね。もっとも、ドイツに比べると医者も医学部の学生も女性割合がかなり低いのですが、テレビでコメントをする医者はみな男性で、女性の研究者が出てくると叩かれる傾向があります。髪型がどうなったとか。

女性が損しているというのは、これまではよく男性は「自分は長時間労働だから家のことができない、子どもの送り迎えができない」と言えましたが、今は家にいるわけです。「家にいるのになぜあなたはやらない？」という、女は損しているところに繋がる。男性の「俺は仕事だ」というのに対し、「私も仕事です」と女性も言える。コロナ禍で家庭という領域に労働の要素が入ってきたことで、ポジティブに回る可能性もある一方で、領域の問題ではなく、違う論理で家事・育児を男性がこれまで断ってきたというところが見えてくる。

かつての世界大戦では、男性が兵士にとられ、男性の代わりに女性が公的な領域に出て行きました。それは非常時ということで、戦後、女性はもとに戻されました。今回、家庭という領域にコロナ禍という非常時として男性が入ってきたわけです。その後どうなるのか。また平時となった時に男性のみが公的領域に戻るのか。「そうはさせないぞ、まさに今こそ私的領域における男女共同参画を考える良いチャンスなんだ」とも言える。男女の公私領域の二分論など昔の話、とは言い切れない現実を前にして、ポストコロナに楽観的なところで期待したいところです。村上先生がおっしゃるように、「女が損をしている」というところがコロナ禍ではっきりと立ち現れてきたのではと思います。

村上：そうですね。これはZeitという週刊新聞（進歩的だけど進歩的すぎない論調の新聞）で、女性がいかに大変かという投書が大きく取り上げられて、「ロックダウン中で学校も休みで子どもも夫も妻も家にいる状況で、にもかかわらず買い物に行くのも料理をするのも妻で、子どもの勉強をみるのもお母さんで、子どもが何かと呼ぶのはパパではなくママである」という投書がずらりと並んでいる紙面がありまして、そのしばらく後に、男性からのエッセイの投稿があって「男は全然協力的でないという論調が強いようだけれど、何もしていかないわけではないんだ」という防衛的なエッセイが掲載されたりして、実際問題どうなのかは別として、こうしたことが有名な新聞でまともに取り上げられて大きく報道されていること自体が珍しく、これまでにはあまりなかったことなので、これまでにはっきり意識されていなかったことがコロナ禍の状況で明確になって、じゃあこれからどうするか、ということかなと私も思います。

村田：日本もヨーロッパもなぜこんなにも似ているんだろうと聞いていました。やはり周りでは勉強をみるのも食事を用意するのも母親がやっている状況ですよ。

私は学校以外で行われているいろいろな教育活動の施設のことを研究しています。公民館も図書館も、そうした公的機関が非常事態宣言の時にピタリと閉じてしまいました。何が起きたかという、今そうした機関はわりと福祉的機能を担っていて、いわゆる介護施設とかではないですが、人と人が淡く繋がっていくところを支えているので、たとえば知的な障害がある人たちが集まる講座があったけれど、コロナ禍でそれを閉じるとか、そうした人たちは電話とかメールで連絡が全然うまくつかないので、本当にきちんきちんと1週間のうち、ここでみんなが集まってこういうことをするんだよということがあって、生活がうまく回っていたのが、家に居ざるを得ない。職員さんが連絡を取ろうと思っても電話もうまく繋がらなかったりするという話を聞いたりします。今でもなかなかもとには戻っていません。

図書館は少しずつ工夫もされていますが、学生とはちょっと違って、本を借

りて知識を得るだけでなく、そこで心身の安定みたいなものを得て生活を安定させている人たちが、行き場所を失ったり、公費で勉強できていたことができないとかいうような状況が広がっています。職員さんたちはなんとかいろいろ工夫をしながら支えておられるのですけどね。学校に通うこと以上に、人の繋がりが奪われているなど痛感します。これ以上みんながバラバラになって孤立してはいけないので、そこを取り戻すための工夫をこれから考えていく必要があります。具体的に何をするかまではまだわかりませんが。本当にこれは痛手ですね。

一方で、学童クラブはとにかく必死で働きつづける親御さんを支えるために学校が休みになってもむしろ開いていて、学生たちも教育学を専門にしているということもあってアルバイトをしている人も多くて、朝から大忙しと言っていました。エッセンシャルワークもそうですけど、支えている人たちへの支援をどうにかしないといけないと考えています。

もう1つ、この状況の中で望まない妊娠が増えている話と、歌舞伎町でコロナウィルス感染者のクラスターが頻発した時に「夜の街」というような差別的な眼差しでの報道や小池都知事の発言などがあったことがすごく気になりました。なぜ、その人たちにそういう呼び方をするのか？ コロナウィルスの感染は誰にでも起こり得る、自分だけが安全なカプセルの中で守られているわけではないのです。だとしたら問題の捉え方の枠組みや現象の名づけ方はみんなの問題だと思えるような名前つけ方をしていかないと、どんどん差別が無自覚のうちに増殖していることがすごく気になります。

人間が人間であるために不可欠な人との関係が奪われているコロナ禍の状況と、それへの闘い方を考えなければならないと思います。また、差別が無自覚に増殖している、健康や安全のためなら何をやってもよいという風潮が気になっています。

弓削：健康のためなら何をやってもよいのかという問題提起は、健康というキーワードでドイツ・ナチズムの政策を想起させられるところがありました。コ

コミュニケーションに関してですが、私の近所にコロナウィルス感染への心配が強いのか、郵便配達や宅配業者に対して、荷物を届けに来てインターフォンも押さないでくれ、そこに置いておいてくれという張り紙をしているお宅があって、配達する側もいろいろな覚悟で配達をしているのに、「それはないよなぁ」と思ってしまいました。健康を守りたいという思いが行き過ぎると、人との繋がりやコミュニケーションを犠牲にしてしまう、やり方の問題とか、こういう時だからこそ人への配慮が取れている人と取れていない人が見えてくるのだと感じました。

高井：今の先生方のお話を伺ってすごく思ったところがあります。私は大学院から長くアメリカに住んでいたのですが、働いている成人女性として日本に戻ってきて、子どもが生まれるまでは男女不平等とは言ってもそこまで女性だけが何もかも背負うわけではないと思っていたのですが、今回いろいろな公的な支援を受けて、たとえば区役所の3・4か月健診のお知らせを見た時の言葉の使い方がすべて「お母さん」でくことに驚きました。こういうところから前提になって刷り込まれていくのかもしれないと感じ、お母さん側の気持ちとしても「なぜお母さんだけ？」と思ったんですね。お父さんだけが育児をする場合もあるのに、お父さんの疎外感がすごいなど。

先日も、区役所のお便りに「外国人のお母さん向けの日本語講座」や「お母さんのための離乳食講座」というのがあって、お母さんだけ？ お父さんではいけないの？ と違和感を感じました。外国人も公的支援の対象にしていたりお母さんに対する支援が充実していて素晴らしい反面、すべてをお母さんに押しつけようとしているようでもあり、今後もう少し良い方向性に向かうといいなど、利用者になって感じるようになりました。

村上先生のお話にあった移民という点を考えると、日本は閉鎖的ですから外国人はダメという線引きがあって、外国人だと配偶者でも一度国外に出しまうと帰ってこれないという。だいたいヨーロッパでは配偶者は例外的によかったりしますが、日本は国境が閉じられる前に出国した人はまだよいですけ

ど、その後に出たら、ということがあります。実際、親の葬式のために出国して、なかなか再入国できずに困ったという知人の話も聞きました。

アメリカと一言と言っても、地域で異なりますし、トランプ派と非トランプ派があってマスクをつける／つけないなどが政治的に利用されている面もあります。ジョージア大学の友人の話では、勤務校がトランプ派の多い南部の州立大学であるため、もう授業を再開していて、コロナウィルスで亡くなった方も出ているようです。アメリカは大統領選に向けて、国民の健康よりも思想がどうなのかという方に関心が向いているのが残念です。ジェンダーの点では、DVや子どもへの負担、望まない妊娠の増加などが問題になっていると聞いています。

国際日本学の視点では、松前先生のお話と同じく、海外との行き来があるのが当然なのですが、今年の夏のクォーターは、ジョイントアポイントメントの先生が北米の先生でいらっちゃって、カリフォルニアやニューヨークの先生が日本に来て大学院で教えるというのがオンライン授業に変わりました。リアルタイムで授業をしようとするとう向こうの夜中になったりとき差があります。自分の復帰する来年の春にはどうなっているのか、今とりとめもなく考えているところです。

弓削：ありがとうございました。今日の座談会は、「コロナ禍とジェンダー」について、何か結論を出す場としてではなく、経験や思いを共有し、1人ひとりが考える契機になればと思います。最後に今後の展望などございましたらお願いします。

松前：先生方からいろいろなお話を伺ってあらためて考えさせられました。私は、たとえば今回の給付金も基本的に世帯主に給付することになりましたが、それが当たり前とならずにやっぱりおかしいんじゃないかと問題提起の声があがってくる、これまで当たり前とされてきた部分が変わってくる芽みたいなものも少しずつ見えてきていて、だからこの状況が戻ったらもとのままとということにならないで済めばよいなというのがあります。

コロナ禍の中で自分の研究とも絡めて、ケアを誰がどう支えていくのか、子育ても高齢者介護もどちらもありますけれど、自分の親や自分自身が高齢になった時を含めてすべて自分事なので、もとに戻らずに芽生えた疑問を考え続けていきたいです。

村上：先ほどドイツの話をした中で、1つ言い忘れたことがありました。ドイツでロックダウンが次第に緩和され始めた時期に、ある食肉加工会社で大量のコロナウィルス患者が発生した事件がありました。1000人ほどの大クラスターで、ほとんどが外国人労働者で、環境の悪い住居に押し込められているに近い状態で住んでいて、ドイツはイギリスを含めたヨーロッパの中で、どちらかという階級社会ではないような社会なのだけれど、このように底辺に外国人を抱え込んで、そこで階級のようなものが発生していて非常に大きな差ができてしまっていることを痛感させられた事件でした。

日本では、政府の閉鎖的な政策によって外国人労働者が大量に入ることはこれまではなかったし、それを開放しようとしていた矢先にコロナ禍になったので、具体的にはまだたくさん外国人労働者が入ってくる状況にはないけれど、もしもコロナ禍が終わって、外国人のこれまでとは違ったエッセンシャルワークをする人たちも入ってきてよくなったなら、まさにドイツだけでなくシンガポールでも確か似たようなことがありましたが、外国人の労働者が底辺に追いやられて、非常に状態の悪い人たちということで階級化が明確になってしまっているのではないかと。実際に、いわゆる研修生として日本に入ってきてくれている人たちも雇用者によっては非常に条件が悪い状態で生活をさせられている人たちが現実にいるわけですから、大きな問題になる可能性があるなと思っていて、そうならないように日本の社会でどうやって受け入れていけばよいのか考える必要があると思っています。

村田：ジェンダー研究所でも、そうした問題を含め、今後も前向きに取り組めたらよいなと思います。まずは、秋学期のシンポジウム開催に向けて、リモートを使っていろいろな国の方たちにも参加いただくことを考えています。

弓削：コロナ禍の問題だけでなく、ポストコロナの課題にも触れることができ
て有意義な時間でした。本日はありがとうございました。こういう時だからこ
そ、先生方とのコミュニケーションのありがたさをあらためて実感いたしました。